
英霊の憑き人

くるり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英霊の憑き人

【Nコード】

N9615X

【作者名】

くるり

【あらすじ】

英雄なんていない。それが天馬光の人生観だった。

しかし、中古店で買ったビー玉にとある国の英雄の霊が宿っていた。光はしらずうちに契約を交わされ英雄の力をもつ事となる――――

英雄（前書き）

ぼっ、と思いついたものを書きました。
アップは週2回を目指します。
よろしく願います。

英雄

英雄。

俗にヒーローや正義などと、この世界では言われる。

英雄とは民族や国家、さらには一人の人間から世界までを救い、時代を超え多くの人から敬意の心を抱かれている者。

そんな者はこの世にはいない。

それが16年間生きてきた天馬^{てんまみつる} 光の人生観だった。

途中までは本当にそんなものがあると信じていた。

英雄の事がつづられている本を読んではわくわくしたものだ。

でも、だんだん成長し世界を見ていく事で今の人生観ができた。

ホームレスが路上で寒い思いをしている、自分はコートを着てカ

イロを持ってまるで一つの風景のように、見過ごしていく。

誰かがいじめられていても、なにもないかのように過ごす。

光の時もいっしょだった。

中学の時にささいな理由でいじめられた。

誰かが助けてくれる。今にヒーローが自分を救ってくれる。

そう信じていた。

しかし、英雄は光の前には現れなかった。

◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

キンコンカンコンというチャイムの音とともに教室は椅子を引く音と、しゃべり声でいっきにざわめついた。

光もそれに合わせ家へ帰宅する準備をする。

「光。いっしょにかえろーぜ」

高校ではいじめられる事もなく、こういう風に放課後声をかけられる事も多かった。

一度いじめられた事がある光にとっては友達ではなく、あくまで友

達風のものであったが・・・。

「ああ。別にいいよ」

できるだけいい表情をつくり言う。

ほかの数人の友達風のもと、いっしょに下駄箱へ行く。

そして、帰ろうと自転車置き場を通りかかった時、

「おい、金くれや」

という声がうしろの方から聞こえた。

振り迎えると、自転車置き場でいつもいじめられている生徒が、いつものようにカツアゲされていた。

「あのお、えっと・・・お金もってないです・・・」

「なんだと！コラァ！」

と自転車置き場いっぱい広がる声をカツアゲしている不良が出す。カツアゲされている生徒が周りに視線を送り助けを求める。

しかし、誰も何事もないかのように帰りさって行く。

やっぱりこうだ。誰も助けない。英雄なんていないんだ。

「光。おいてくぞー」

「なあ、みんなでカラオケいこうぜっ！」

「おお！いいねっ！」

こいつらだっけそうさ。気づいてるはずだが見ぶきもしない。

「光は行く？」

「あっ・・・今日は用事があって無理だわ。ごめん」

「そーか。じゃあ、また今度な！」

「うん」

とりあえず行かないことにした。

今の気分では自分のさっきの感情が、バレてしまうと思ったのと、腐ってるやつらといったら、自分もさらに腐ると思ったからだ・・・。

自分も腐っていると思った事は何度もある。

でも自分には力がなくできないことがない、

まだ気づいているだけでした・・・。



光は今の気分をリセットするため、なんとなく商店街をあるいていた。

するとある中古店にある、ビー玉のような小さなきれいな玉に目が惹かれた。

（なんだろう？とても惹かれる。普段ならこんな事ないのに・・・）
とりあえず中古店に入り、ビー玉のようなものをつとめた。

（なんでかわからないが、これを手にしないといけないような気がする。）

そう、思い店員に値段を聞き買うことにした。

「すいません。これはいくらですか？」

會計にいた老人に聞く。

「それは……。何円かわからないねえ。そんなもの売っていたかもおぼえてないねえ」

「えっ・・」

思わず声を上げる。

「まあ、年だから許しておくれ。特別にタダにしてあげるから」

「あつ、ありがとうございます」

少しとまどってしまったが、せっかくなので頂くことにした。

「まあ、いいよ。こんな店趣味でやってるみたいなものだから」

老人は笑いながら言った。

「用があるので失礼します」

長引きそうなので退散することにした。



光は家に帰り、玉を見つめていた。

（なんでこんな玉をほしいと思ったのだろう。きれいだが、ビー玉ぽいっし・・・）

帰ってからそんな事をずっと思いつづけていた。

とりあず別の何かしようと、ベットから起き上がる。

窓を見ると中学生が学校の不良にからまれている。

(また、あいつらかこりないなあ)

そう思い目をそらし、

その瞬間、

「見捨てるのか」

と冷酷な声が聞こえた。

(今の声はどこからだ？ 周りには誰もいないし・・・)

そんな事を考えていたら気づいたら8時になっていた。

「ただいまぁー」

仕事からかえってきた母さんの声をききビー玉をポケットにしまう。

「おかえりー」

「今ご飯つくるからねー」

返事だけをしてもう一度さっきのことを思い返す。

ビー玉みたいなもののポケットから取り出す。

(なんだったんだろう、さっきの声。はっきり聞こえたし、僕に言
ったような気が・・・)

「光ー」

(なんだよこっちは考えてんのに・・・)

「はいー。何ー」

「ちよつと買い物いってくれない？ 牛乳買い忘れちゃって・・・」
少し考えたが、

「いいよ。そのコンビ二までいってくるよ」

シングルマザーで自分を育ててくれた、母に苦勞させてばかりだ
からせめての孝行だと思い、

行くことにした。

「何本買ってこればいい？」

「1本でいいよ」

「わかった、いってくる」

そう言って家をでて行った。

この夜に僕の運命が大きく変わる事が起こるも知らずに……。

◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

(うう、寒いなあ)

カイロを手にかから10分のコンビニ二向かう。

すると、前からいつも学校でいじめられているやつが歩いていて、
かわるものもめんどうなので無視しようとしたが、あっちから声を
かけてきた。

「ねえ、君って光君だよな？ 同じクラスの。僕は佐藤賢治。よろしくね。」

「ああ、そうだけどどうした？」

「いや・・・あのお、何でもないや」

と言って走り去って行く。

(なんだっただろう？)

少しして明るい電灯のついたコンビニにつく。

入り口には学校の不良がたむろしていた。

自分だと悟られないように、そっとコンビニに入る。

(バレなかったか……。よかった。)

できるだけ時間をつぶし牛乳を買い、店を出る。

入り口には吸殻やゴミ、空き缶などが散乱していた。

(いなくなつてよかった・・・)

母さんが待っていると思い、駆け足で道へ出た。

それでもロスしてると思い、いつもは使わない近道を通る事にした。

(寒いしはやくかえろー)

そう思いながら駆け足で道を進んでいると、

「おい、今日はなめたマネをしてくれたなあ」

また不良かと思っていると思っていると、佐藤賢治が不良たちに囲まれていた。

「いや・・・あのお本当にもってないんです・・・」

「ああ！親から盗ってこいていてってんだろっ！」

（また、あいつかよ・・・。どーせ誰もたすけてくれないだろう）
と思い道を戻ろうとした時、

「また、見捨てるのか」

「！」

あの時と、同じような声がどこからか聞こえた。

「だっ、誰なんだっ！」

「そんな事はどうでもいい。お前はあいつを見捨てるのか？」

「えっ・・・」

つい言葉にとまどってしまった。

「お前はあいつを助けないのかと聞いている。今あいつは助けを求めている。それを無視してあいつを見捨てるのかお前は」

「仕方がないだろう。僕には力がないんだ。力のない者は見守るしかできないんだよっ！」

「お前の言う見守るというやつは、私には自分が可愛くて見捨てる
としか聞こえないんだが。」

そんなに恐いのならほかの助けを呼べばいいではないか、力があ
りあいつを助けられて、あいつの救世主・・・英雄になれるものを連
れてこればいいではないか」

「ちがうっ！この世に英雄なんてものはいないっ！それは僕がよく
知っている。」

そう・・・英雄なんていないんだ、だからあいつを助けれるわけ
がないんだ・・・」

「ならばっ！お前が英雄になればいいっ！」

「だから・・・。僕には力が・・・力がないんだだから・・・」

弱弱しくそう言った。

「力なら私がくれてやるっ！だからお前はあいつを助け、あいつの
英雄となれっ！」

「いや・・・でも・・・」

「今のお前の選択権は二つだ！一つはほかの者のように、見捨て腐っていく道。二つ目は勇気を出し私の力をもらいあいつを助け英雄になることの二つだ！どっちを選ぶ！」

謎の声は声を荒上げる。

「ぼっ、僕は・・・」

佐藤は今どんな気持ちなのだろう？僕がいじめられていた時と同じ気持ちかな？どうなんだろう？

そんな事が頭をよぎった。

「さあ、どっちだ！天馬光！お前もこのまま腐っていくのか！」

僕は一回深呼吸をして、

「ぼっ、僕は腐らないっ！今あんたの力をもらい佐藤を助け英雄になるっ！」

「よく言った！」

すると、ポケットにしまっていたはずのあのビー玉が、神々しく光だした。

（なだこれは？）

手の甲を見るとなにかの紋章のようなものがうかび出ていた。

そしてポケットの中のビー玉は消えていた。

「光よ！なにか棒のようなものを持て！それであいつらのところへ行くのだ！」

道端に落ちていた鉄パイプを拾い不良たちに向かって行く。

「うあああつあああああ！」

「なっ、なんだ！」

「みっ、光君？」

「お友達か。なら、お友達からもらおうか」

と5人でこちらに向かってくる。

もうどうにでもなれと思って突っ込むと、一人めが殴りかかってきた。

終わったと思ったが体はスルリと拳をよけて、鉄パイプで一撃を与えた。

（今の感じなんだ？体がなんか勝手に・・・）

一人目を倒しても次々と殴りかかってきた。

二人目、三人目、四人目とすべての攻撃をかわし一撃ずつを与え全員倒れていく。

「これがあいつの言っていた力か・・・」

「何ゴチャゴチャ言ってたんだよお！」

と最後の一人が鉄バットを持って光に殴りかかる。

「うおおおおおおお！」

勢いよく不良はバットを振りおろしたが、なんなく光によけられる。

「ゆっ、許してくれー」

光は不良に当たる直前で止める。不良はとても情けない顔になっていた。

「ちっ、野郎ども逃げるぞっ！」

鉄バットの不良が言うところよろしながらも、ほかの不良たちも逃げていく。

それと同時に佐藤がかけよってくる。

「あっ、ありがとう光君！君は僕にとっての救世主だ！」

そうだ、お礼といっちゃあなんだけど今これしかないから・・・それじゃあばいばい！」

満面の笑みでお菓子を渡して走り去って行った。

「ねえ、僕は佐藤の英雄になれたのかな？」

「なれたに決まっているだろう。あやつのピンチをお前は救ったのだから」

謎の声が答える。

僕が昔待っていた英雄に。

僕が今いないと思っていた英雄に。

僕はなれたのだ――――――

英雄（後書き）

みなさんと楽しめたらいいと思っていますのでよろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9615x/>

英霊の憑き人

2011年11月13日17時11分発行